わが国における「スポーツ浄化」運動に関する研究 －戦前期日本の学生運動との関連に着目して－

スポーツ文化研究領域

5011A036-9 下山 竜良

研究指導教員： 友添秀則 教授

【研究の目的】

本研究は、「スポーツ浄化運動」の歴史的展開について、戦前期日本における学生運動との関連に着目して分析し、大正・昭和戦前期の学生スポーツ思想の遍歴を明らかにすることを目的としたものである。

文部省を枢軸とするスポーツの政策化動向の中で、為政者たちは何を考えていたのか。また、三一五事件に端を発する思想善導政策としてのスポーツの政治的利用に対して、思想対策の対象となった「学生」たちは何を考えていたのか。

本研究では、「国家」「運動部学生」「左傾学生」など、スポーツの政策化過程に関わりを持つ諸主体の内実に迫りながら、スポーツ浄化運動の歴史的展開を構造的に解明しようとしている。

【各章の概要】

<序章>

序章では、問題の所在が確定した上で、先行研究の検討が行われ、本研究の課題が次のように抽出された。

- 1) 戦前期日本における学生運動の過程で、社会主義思想の影響を受けた学生がどのようにスポーツを見つめていたのか
 - 2) 学友会に所属する「社会主義思想研究会」と「運動部」がどのような関係にあり、彼らが学生スポーツの在り方をどのように考えていたのか
 - 3) 国家からの権力的なスポーツ浄化に対して学生側はどのような態度をとっていたのか
- 本研究では、これらの課題の解明を通して、戦

前期日本における学生スポーツ思想の遍歴を明示していく。

<第一章>

第一章では、「スポーツ浄化運動」を担った「学生」の性質を分析し、学生運動と学生スポーツの関連について言及した。

大正・昭和戦前期におけるエリート学生を中心とするマルクス主義思想の影響を受けた学生運動が、全国的展開を遂げていく過程で、国家の「思想統制」体制が形成されたことを明記した。

そして、「学問の自由」を念頭に学内自治闘争が繰り広げられ、左傾学生と国家及び大学当局の対立が萌芽したことを記した。

国家と学生の対立が激化する中、思想善導策としてのスポーツ政策に反抗的態度を示す左傾学生が現れ、運動部との学内対立を孕みながら、学生スポーツの改革が学生運動のスローガンとして顕在していく過程を明らかにした。

<第二章>

第二章では第一章での考察を受け、国家による学生スポーツ浄化と、学生スポーツへの国家介入に抗うエリート学生の姿態を明らかにした。

1920年代以降の学生野球の隆盛をきっかけに萌芽した「教育一興行」を対立軸とする学生スポーツの二元的価値論争は、東京六大学野球リーグの入場料収入への課税問題をきっかけに大々的な議論を巻き起こした。

東京六大学野球リーグの学生選手の「蛮風」状

況を機に、教育・体育界のイデオログたちが「学生スポーツ浄化対策」に乗り出し、文部省が中心となって学生スポーツ界のガバナンス問題に取り組んでいくこととなる過程を明記した。

そして、文部大臣鳩山一郎の「スポーツ浄化」に関わる言説を追い、国家による学生スポーツへの関与が、「思想対策」に連結していく流れを明らかにした。

また、国家や指導者層に支配されていた学生野球を学生のものに引き戻すための、学生の側からの「スポーツ浄化」があったことを記した。と同時に、学生運動の軸を担っていたエリート学生が、学生スポーツの在り方を示す学生テーゼを提示したことにも触れた。

<第三章>

第三章では、本研究の最終段階として、学生の側から「スポーツ浄化運動」を本格始動させた東京帝国大学運動会に着目し、彼らを中心に結成された「全日本学生体育連合」の動きを追った。

当時のスポーツ政策は学生の思想対策であったと同時に、国民の体力問題を解消するためのヘルス・プロモーション機能への期待があり、「体位向上」機運の高まりが東大医学部教授陣と国家機関との連携を生ませたことを明らかにした。

また、東大医学部教授陣たちが学生スポーツに関与し始め、学生の健康状態を改善するために「スポーツ愛好家」育成に着手したことも明記した。

そして、「スポーツ医学」研究の台頭とともにスポーツ活動による「健全な思想」の形成が期待され、東大運動会派閥の学生スポーツ論が展開したことについて言及した。

一方、東大運動会を中心に結成された「全日本学生体育連合」は、文部省や大日本体育協会、各競技団体との、学生スポーツ界の浄化対策に取り組む連絡機関としての役割を担い、構造的に「官」によるスポーツ統制だとする批判を浴びることになる経緯について述べた。

官製性格を帯びるようになった「スポーツ浄化運動」はその後、プロレタリア国際主義と同質のイデオロギー攻勢を受けることとなった。スポーツ浄化運動の精神的支柱であった「興行化排撃」を軸とする学生「アマチュア」思想は、結果的に国家的スポーツ政策との紐帯機能を果たした。

このことは、アンチ「スポーツ体制」に端を発する学生側からの「スポーツ浄化」が、官製性格を有することとなった逆流現象を意味していると考えられた。

<結章>

以上の考察により、「スポーツ浄化運動」は、国家のスポーツ政策と、それに抗う学生の対立を軸とする重層的なムーブメントであることが明らかになった。

エリート学生たちは国家という支配者層によるスポーツの専有物化に反発姿勢を示し、社会主義思想を論理基盤とする学生運動を通して「スポーツの非政治性」を主張してきたことが明示された。

一方で、「アマチュア」思想が「国家－学生」の対立関係を緩和させ、学生スポーツの在り方について共有し合う一契機となり、両者をつなぐ紐帯機能を果たしたことについて明らかにした。

マルクス主義思想の台頭による階級闘争の歴史に包まれた「スポーツ浄化運動」は、国家独占資本主義社会におけるスポーツの公有財産化としての問題性を持つとともに、スポーツの商品化による特権階級主導の利潤追求を「階級問題」として意識化した学生運動の過程に位置するムーブメントであったことを記した。

それゆえ、エリート学生たちは特権階級によるスポーツの専有物化に抵抗し、学生運動を通してスポーツと政治の分離を叫び、自らを「学生スポーツ統治」の主体として昇華させてきた。しかし、皮肉にもその主体性が国家的スポーツ政策との紐帯機能を果たし、国家総動員体制へと組み込まれていったことが明らかになった。